†人形使いとゴーレムナイト†　～　春風と小悪魔　～

雛仲　まひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†人形使いとゴーレムナイト†　～　春風と小悪魔　～

【Ｎコード】
Ｎ８６７３Ｆ

【作者名】
雛仲　まひる

【あらすじ】
アイナ達の休暇も終わり雇い主の公爵とフェリナスで合流をしたアイナとランス。しかし、雇い主のクラウス公爵にシオンの事をどの様に切り出すか悩む二人。一使用人が雇い主に頼みごと等出来る筈もなく悩んでいた。二人の雇い主は由緒ある公爵家。思い切って話すもシオンは素性が解らない記憶喪失の少年それを理由に断られてしまう。そこに現れた公爵のお嬢様を巻き込みシオンを雇わせる為の作戦を画策するが……。果たしてアイナ達はシオンと一緒に暮らす事ができるのか？恋する乙女の悪巧み！その結果は如何に！

～　春風と小悪魔　～　第一話（前書き）

†人形使いとゴーレムナイト†　～　伝説の胎動　～

完結。

第二弾　全六話

～　春風と小悪魔　～　第一話

†ＧＡＴＥ１　新たなる旅路

そよそよと頬を撫でる春風に乗り野原を彩った花の甘い香りが漂い一面の空気を染めている。

フェリナスの街に三人と一匹？　シオンの肩には三十セール程の女の子？　が腰を下している。

フェリナスの街はログの村から、南に馬車で半日程の所にある、ラナ・ラウル王国でも有数の商工の発展した街でラナ・ラウル王国は南端に大きな港も持っている。

今から三人はアイナとランスの雇い主であるクラウス公爵の下に向うのだが、やはり落ち着かない様子だ。

「アイナ、どうするの？」

ランスがアイナに耳打った。

「ランス、こそ、どうするのですぅ」

アイナは困った顔をしてランスの顔を見た。

シオンに一緒に来いと言ったもののよくよく考えてみれば、由緒ある大貴族の公爵に一介の使用人が口を出せる身分ではないのだ。

クラウス公爵は政腕に優れ以前、若くして旧カストロス王国の大使を務めた程の人物でもある。公爵はカリュドスのカストロス進軍の前にラナ・ラウル王国の内政に戻った。

カストロス陥落後の数年後にカストロスの陥落で落ち延びたナタアーリア一家と偶然、フェリナスの街で再会し一時、保護していたのだが母の本当の生れについてアイナとランスはその事を知らない。

公爵はナタアーリアに、このまま領地に住むよう進めたが、ナタアーリアは公爵に何らかの害が及ぶ事を嫌い。当時、住み始めたロ

グの村でひっそりと暮らす事を選んだ。
せめてもと父を亡くしたばかりの二人の子供を奉公に出すと言う形で話は進み二人を保護しているのである。

シオンの事をどう切り出すか悩み込む二人の耳に、街の商人達の噂話が飛び込んでくた。
「最近、亜人だの妖魔だの増えたねぇ」
「まったくだ。ここは、まだ治安がいい方だが、この辺りにも増えたな」
「先日、船も海獣に沈められたし内陸じゃオークだの夜はトロールに襲われるなんて話だ」
「馬鹿いえ、アンデットやバンパイアやキメイラなんかの異形の魔物も出やがるて聞くぜ」
「領主様達は何してんだか」
「今は、平時だが候軍は万一に備えて軍を裂けないんだよ」
「それで傭兵集めて新たに傭兵ギルドお起てるみてぇだぜ」
「ちげぇよ。守護者ギルドって言うらしいぞ」
傭兵は戦争があれば軍に借り出されるが、平時はあぶれ盗賊や海賊に身を窶(やつ)す者が多い。
戦での功多き者は候軍や王軍になる事もあるが稀であった。

二人にの耳にそんな会話が聞こえたが、今はそれどころではない。シオンをどうしたもんかで頭はいっぱいである。
「ダメでもともと、とにかく公爵様にたのんでみよう」
ランスがアイナに耳打った。
取りあえず三人はクラウス公爵の元に向いクラウス公爵の滞在している宿で主の帰りを待つ事にした。
例の鬼妖精人目につく為、人目に触れぬ様ズタ袋の中に入れておく事にする。文句を言いながら鬼要請はしぶしぶ袋の中に入った。
仮にも得体の知れない妖精を街中で連れて歩くなんて出来ない。

王宮のある王都の近衛兵の中には野生の聖獣や魔獣を手名づけ馬の代わりに使う隊もある。
グリフォン、ペガサス、ヒポグリフ、マンティコア、ユニコン等であるが、その中でも“現在種”の強力なブレスを吐く竜は賢く気難しい為、希少な竜を扱う兵は少く多くの竜騎士の多くは特殊な魔法で生み出す魔法生物、亜竜（デミ・ドラゴン）を使っている者が殆どだ。

公爵の帰りを待つアイナとランスは気が気じゃない。
仕事で疲れているであろう主になんと声を掛けシオンの事を切り出せば良いのか、頭から煙が出そうな勢いであった。
二人がああだこうだと悩んでいると宿に戻ったクラウス公爵がアイナとランスに気付き声を掛けた。
「二人共、戻ったのかね。母上殿は元気で居られたかな？」
「は、はい」
二人は緊張の面持ちで返事を返した。
「そうか、それはよかった。ゆっくりできたかね」
クラウスは微笑を浮かべた。
「ときに、その少年は？」
公爵が二人と共に居るシオンに気付き尋ねた。
「はい、この少年は友人のシオンと申します。この者が公爵様の所で働きたいと言いますのでお伺いをたてに参りました」
ランスが緊張しながら答えた。
暫し公爵が難しい顔をしていたが、シオンを観察する様にを見て言った。
「見たところ外国の御人の様だがこの国とも西の国とも違う顔立ちだが、お国は何処かね？」
シオンは無論、記憶が無いので答えようも無い困った表情で言った。
「そ、それは……」
困っているシオンを見兼ねたランスが変わりに答えた。

「その者は、私共が公爵様にお使えする前よりのログの友人で、孤児です」
咄嗟に答えたランスの後を引き取りアイナも言葉を発した。
「シオンには記憶がないのですぅ。生まれた国も覚えてないのですぅ」
暫らく公爵は難しい顔をして考えてから答えた。
「すまんが、雇う訳にはいかん」
「な、なぜですぅ」
アイナが主である公爵に食い下がった。
「お前達は、良く働いてくれる。他ならぬお前達の望みを叶えたいが素性の分からん者を雇う訳にはいかんのだ。私は仮にも公爵家の者、こんな事は言いたくないのだがね。他の従者達の手前もある。分かっては貰えんかね？」
ナタアーリアの事もあり、公爵も二人にはある程度の優遇を取っていた。
この旅の帰郷もその為だった。
二人は良く働くのでこの度の特別な計らいに他の者からの不満の声は上がらなかったが、行き過ぎた行為はこれからの二人の仇になり兼ねない。

アイナが更に食い下がろうとした時、シオンが止めた。
「シオン？」
「いいんだ。お前らには十分世話になったから、これ以上迷惑かけれねぇよ」
シオンが微笑んで言った。
「シオンでも……でも」
アイナの顔が悲しげな顔をした。
「いいから」
シオン達を見てクラウス公爵が口を開いた。
「お前達は明日の朝まで休みなのだから、今夜はその少年も一緒に

この宿に泊まるといい」
公爵のせめてもの温情だった。

「お父様、お帰りになられていたのですか？」
宿の奥から金髪の髪の少女がクライスに話し掛けた。
「おお、ティアナか明日にはここを発つが王都の学園の入学手続きの準備は済んだのかね？」
ティアナは王都にある高等学院に入学する為、フェリナスに公務に来た父と道中を共に来ていた。
「はい、済ませておりますわ」
と答えアイナの傍に来て耳元で囁いた。
「ちょっと、アイナあの子誰よ？」
「シオンの事ですぅかぁ？」
公爵が部屋に向うのを確認してティアナがアイナに笑みを向けた。
「かっこよくて素敵ね。あの人アイナの恋人？」
ティアナが小声で尋ねる。
「ち、違いますぅ」
アイナは顔を赤らめた。
「じゃあ、私が……」
ティアナが何か言うとしたが、アイナが焦の混じる声で言った。
「ダ、ダメですうぅ」
「何でダメなのよ。やっぱり恋人なの？」
「ち、違いますけど、ダメなものはダメですぅ。ほら、仮にもティアナは大貴族の御令嬢ですぅよ」
「仮にもとはなによ。仮にもとは」
「身分が違い過ぎますぅ」
恋人じゃないけど……キスしたもんとアイナは思った。

「お嬢様、お食事の用意が整いました」
ティアナに従者の一人が声を掛けた。

「今、行きます」
と答え言葉を続けアイナに言った。
「後で、話なさいよ」
にやけた笑みを浮かべて言い残しティアナはその場を後にした。

三人は宿の下にある飲み屋を兼ねる食堂で食事を摂る事にした。
「どうするかな」
ランスがポツリと呟いた。
「まあ、なんとかなるさ」
シオンが答えた。
「ログに戻る？　母様も言ってたし駄目だった時は来なさいって」
話の中に鬼妖精がテーブルの下から口を挟んだ。
街の者達が言ってたじゃまい。傭兵ギルドが出来るって」
「傭兵ギルド？」
シオンが尋ねた。
「ギルドも知らないの？　組合よ。商人ギルドなんかは前からあるじゃない。傭兵ギルドは聞いた事なおけど。それが正式に国の許可で出来るでしょ？」
「シオンが傭兵になんてアイナは反対ですぅ。戦争は嫌いですぅ」
「小娘が戦う訳じゃないし戦争とは限らないよぉ」
「俺も人がたくさん死ぬ事になる戦争なんてごめんだぜ。お前の友の願いとやらはどうすんだ」
「人間ども、よく考てみなよぉ。噂じゃ魔物に加え何だかヘンな魔物の動きが活発になってるみたいだって。ヘンな魔物は兎も角、長い歴史の中には何度かある事だよ。たぶん、それらに対抗する為のギルドだよ」
「妖精もどきのお前が言うか、それに魔物だっても生きてるんだろ」
「確かに、友の言う争いになるかも知れないけど……だって“生きる”“護る”戦いもあるよぉ」
「友の願いをお兄ちゃんが全て叶え、想いを背負う事はないの……

お兄ちゃんは自分の絶ちたいものを絶てばいいのよ。それが何れ友の願いの“ひとつ”でも絶つ事になるなら私はそれでいいの。だから、私は友とお兄ちゃんの傍には私が居る」
淡々とした口調で鬼妖精が言った。

「その傭兵になったとしても俺は魔物の事を良く知らないぜ？」
「な――に、だから私がお兄ちゃんの傍にいるんだよぉ」
何処となく嬉しそうに鬼妖精が微笑んだ。
「シオンを危ない目に合わすのですぅかぁ」
アイナが怒りを含んだ目を鬼妖精に向けた。
「だからぁ　私がお兄ちゃんの傍にいるんだぉ！」
「お前なんぞ、チビのくせに生意気言うなですぅ」
アイナが小馬鹿た様に鬼妖精に言葉を放った。
「チビチビ馬鹿にするなぁ――。姿を元に戻せば済む事だもん。まあ、心臓半分になったから今はあの時の三分の一位にしかなれないけど……三年も経てば回復するもん。それにゴーレムだってあんたなんかより凄いの作れるもん」
その話を聞いてアイナがなにやら閃いた。
「大きさは、自由に変えられるのですかぁ。チビ」
「まあ、今の限界まではね」
「しゃ――ねぇえなぁ、ティアナに相談するですぅ」
「お嬢様に？　言っても同じじゃない？」
ランスが呆れて言った。
「アイナはティアナと仲良しですからぁ大丈夫ですよぅ。たぶん！」
怖がりで人見知りだが、気を許す者には身分の違いに関わらず接する。
そんなアイナの屈託の無さは周りをほのぼのさせ和ませる。
ある意味で怖いもの知らずで天然の成せる技だ。
「そうと決まれば行くですよぅ」
アイナが意気揚々と声を上げた。

「はぁ、やっぱりそうなるんだよね。いつも」
ランスは切なげに呟いた。

シオンは二人に任せるしかないのでだまっていたが、内心大丈夫かこいつらログに居た方が良かったなぁと、ちょっぴり後悔した。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

～　春風と小悪魔　～　第一話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。＞（＿）＜

次回をお楽しみに！

～　春風と小悪魔　～　第二話

†ＧＡＴＥ２　春の小悪魔

夜空の星が宝石の様に輝きを放ち、夜風が程良く肌を刺す夜に宿の一部屋では密談が行われていた。

「それで私のところに来たのね？」
ティアナがシオンの様子をチラッと窺がった。
暫らくシオンを観察する様に見た後……。
「いいわよ。その話乗ってあげるわ」
シオンの容姿を見たティアナが微笑みを見せた。

乙女の直感がティアナのシオンを見る目に、ただならぬ何かを感じたのかアイナはティアナの耳元で呟いた。
「なに、企んでるですかぁ？」
「企んでるのはアイナでしょ？」
「そうですぅけど、違うですぅよ」
「何が違うのよ」
小声で話す二人にシオンが尋ねた。

「何、二人でこそこそ話してんだ」
アイナはティアナの手を取ると立ち上がり部屋の外に出ようとした。
「ちょっと、きやがれがれですぅ」
「どこ行くんだ？」
二人にシオンが尋ねた。
「おしっこですぅ」
言い残すと、すたすたと部屋を出様とした。

「ちょ！　違うからね。シオン！　アイナ、レディなんだからせめて『お花を摘みに』とか言いなさいよ」
ティアナが慌ててアイナに言った。
「夜に花摘みて……おかしいですぅ」
「そんなの分かってるわよ！　慎みよ！　レディの慎み」
「なんだ、連れションか」
「シオン！　あなたまでぇ」
御立腹のティアナの手を引きアイナ達が部屋を出て行った。

「でもよぉ。そんなんで上手くいくのか？」
「アイディアはいいと思うよ。あの公爵様は自分の娘を助けてくれた人が困ってるのをそのままにはしないよ」
「そんなに上手くいくもんかなぁ」
シオンが疑いの交じる声で首を傾げた。
「そりゃ、なんかくれるかもしんないけど、そんなんで屋敷に置いてくれるのか？」
「助けただけならそうかも知れないけど剣で魔物を倒せば話は別だよ。そんな強い剣士なら自分の旦那様もご自分の軍に欲しくなるよ」
シオンは以前ランスから貰った剣を失っている。
フィノメノンソードがあるのだが、使い方すら分からない。それどころかソードなのかも怪しい。

「だから、軍人になるなんて嫌だてぇの」
「魔物を倒した程の剣士なら、公爵様直轄の衛士にして貰えるかも知れないよ」
「でもよ。剣も無いしどうするよ。フィノメノンソード刀身ねぇし」
「フィノメノン使えばいいでしょ……あぅ、使えないかも」
鬼妖精が眉間に皺を寄せ言葉を続けた。
「お兄ちゃんの為に私が魔物に化けてあげる」
「俺、魔物なんてオークしか見たことねぇもの。違い分かんねぇよ。

確かにお前が化けてくれるなら前もって何に化けるかと特徴を教えてくれたら解り易いけどな」
「竜なんてどう？　魔物の中でも最強の部類に入るよ」
「げっ！　そんなのと闘えるかてぇのか？」
「だったら、何だったらいいのよぉ」
「知るかよ！　どんなのがいるのかもしらねぇのに」
「なら、ランスに聞いてみなよ」
「どうなんだ？　ランス」
　シオンが尋ねた。
「竜にしたら？　僕も魔物の事なんて詳しくは知らないけど母様に現在種は利巧だけど言葉は喋れないし僕の見た竜は見た目爬虫類みたいだったけど強そうだったよ」
「ばれるだろ？　一人の剣士が竜に勝つ事自体が怪しい」
「大丈夫だよお兄ちゃん！　私がゴーレム用意しといてあげるから」
　鬼妖精がシオンに微笑み掛けた。
「「それは名案だ」」
　二人は声を揃えた。
「お兄ちゃんにも出来る筈だよぉ。今は知らないだけ後、あの娘もあなたも」
「一対一、剣だけで竜に勝てる者は居ないからね。現在種といえ鱗は硬いそう簡単には剣の刃が通らないから、ゴーレムを使えば倒しても不思議じゃないよ」
「それもそうだね」
　ランスが頷いた。
「それより遅くないか？　あいつら話詰ねぇと終わらねぇ」
　シオン達が話を聞いている時、部屋の外ではアイナがティアナに何事かを言っていた。
「いいですぅかぁ。シオンに手を出してはならんですよぅ」
「あら？　どうして？　私結構シオン好みの男性よ。あの銀の髪に

光が当るとほのかに淡いブルーが浮き出すの……とても幻想的で綺麗だし分からないけど、とても強そうなオーラが出てる感じがするの。引かれちゃうわ」
「だ、駄目ですぅ。兎に角シオンは駄目ですぅ」
焦った様子でアイナが言った。
「シオンて妖精と意思の疎通が出来るなんてかなりの使い手なの？」
自分もランス、シオンが魔法を使える様になっている事を他の誰にも話してはいない。これからも話すつもりも無い。
「シ、シオンは、ただの人間ですぅ。ほ、ほら孤児だったので寂しくてどこぞで幻獣の幼生を拾ってきて育てただけなのですぅよ、まったく根の暗い野郎ですうよぅ。だからやめといた方がいいですぅよ」
アイナは声を震わせ言った。
「怪しいわね。ねぇアイナ、あんたシオンさんが好きなんじゃなの？」
ティアナが目を細めた。
「べ、別に、そんなんじゃないですぅ。けど……」
アイナは俯いて答えた。
「けど、なぁに？」
「その、あの、えっと……」
アイナは口籠ってしまった。
あの時、シオンがゴーレムと戦った時、シオンが生きていて嬉しかった。
そしてとても愛しく思っえて自分も気付かない内に自然に唇重ねていた。
でも、シオンは自分は本当に好きなのか改めて考えると良く分からない。
シオンの持ち物のエッチな本を見てなんだか苛々したので燃やした。
自分でもその気持ちが良く分からないのだ。

「と、兎に角シオンはダメですぅ。ティアナとは身分が違いますし
シオンは何処かの外国人で平民ですし公爵家のお嬢様のお相手にす
るにはねぇ」
しどろもどろになりながらアイナは言い訳をしていたが、ティア
ナの視線が怪しいものを見ている目になっている事に気付くと深く
俯いた。
アイナは今のティアナがしている様な目が嫌いだった。それが友
達で悪意がなかったとしても……。
「部屋に戻るですよぅ」
自分で呼んでおいてへんなのと思うティアナだった。

部屋に戻るとシオンが苛立った様子で言った。
「おせぇよ。お前等えらく遅かったじゃねぇか。うん――」
その先を口走る前にアイナの拳がシオンの顔面を捉えた。
「レディに向ってなんてこと言いやがるですぅかぁ」
「まだ、何も言ってねぇ」
「下品な事、口走りそうだったですぅ」
「二人共いい加減話詰めようよ。もう遅いし」
ランスが呆れて二人に言った。
「鬼妖精に何に化けて貰うか、考えなきゃいけないしな」
シオンが息を吹き返し言った。
「化ける？　その妖精が？　なんの話なの」
不思議そうにティアナが尋ねた。
ティアナに、まだ詳しく鬼妖精の事は話してない。
シオンが幼い頃から飼っている妖精を使うとティアナには適当な
事を言ってあったのだ。
ランスはしまったと言う顔をした。
「ああ、竜に化けて貰い、ゴーレムも出して貰う」
しかし、そんな事に気付いていないシオンが口を滑らせ言ってし
まった。

ランスは手を額に当て無言で嘆いたのだった。
言ってしまったものは仕方ない。ランスが鬼妖精の事を話した。
「かわいい妖精さん。宜しくね」
ティアナが笑みを作り挨拶をした。
「でも、珍しい妖精ね」
「ち、珍種ですぅ」
アイナが適当な事を言った。
「何にせよ凄いわ。妖精を連れてるなんて、益々シオンさんに興味でてきたわ」
感激した様子でティアナが目を輝かせてシオンを見ていた。
「そ、そうなの？　妖精連れてるのって凄いのか？」
目を輝かせ自分を見ているティアナを見て満更でもない様子だ。
デレデレした顔をしているシオンを見ているとなんだか面白くない。
（シオンの馬鹿）
とアイナは心の中で呟いた。
その話で夜も更け何に化けるのかは、鬼妖精に任せシオン達は明日からの長旅に備える事にした。

クラウス公爵の領地までは、ログの村を越えログの北西にある。
ラナ・ラウルの王都を通り抜け更に北に向い馬車で約七日程は掛かる所にクラウス領はある。
アイナ達の計画ではフェリナスを出て暫らく進んだ街道の人気の無い所に出た所でティアナが鬼妖精がの化けた魔物にさらわせ、ログとの分かれ道まで同行するシオンがティアナを助け出す算段になっていた。
竜では強すぎるし弱すぎれば公爵の護衛隊でも倒せてしまうので化ける対象は長生きで賢い鬼妖精の匙加減に任せてある。
シオン達も何に化けるのかを知らないのだ。

翌朝、クラウス公爵一行は北に向かい出立する。ログの村との分かれ道まで約三時間程で着く、その間に鬼妖精が化けたものとやり合う算段だが、いつ現れるかも分からない。
今の場所は街からまだそんなに離れてはいない。
暫し進むと辺りに草原が広がっていた。野には春を彩る花が咲き誇っている。
「綺麗ですぅ」
アイナが頬を緩ませた。
「ほんと、綺麗だね」
ランスも素直な感想を述べた。
「この大地に咲く花も生きているのですねぇ」
アイナが微笑みを浮かべた。
竜に化けて空を旋回していた鬼妖精がが一行の進路にいる生物を遠くに見つけた。
鬼妖精が魔法で姿を変える。
「水と風の精霊よ我に流れしものを変え包め」
呪文を詠唱すると一羽の鷹に身体を変えシオン達が乗る馬車に向った。

馬車の中はシオンとアイナとランス三人だけだった。
公爵とティアナはひと回り大きく豪華な馬車に乗っている。
他の従者もそれぞれ、馬車に別れて公爵の乗る馬車を挟むかたちで乗っている。
　シオン達の馬車に一羽の鷹が飛び込んできた。
「うわっ」
シオンとランスが驚く。
「ひぃや――」
アイナも驚き何故か隣に居るランスではなく向かいのシオンに飛びついた。
鷹が空座になっていたシオンの隣に降りた。

「び、びっくりした。なんだ鷹か」
ランスが言った。
アイナはシオンにしがみついたまま震えている。
「鷹だってよ」
シオンがアイナに教えた。
「お兄ちゃん」

鷹が喋た……。
一同再び驚くが聞き覚えのある声だった。
「もしかして、お前か？」
「そうだよぉ」
鷹に姿に変えた鬼妖精が答えた。
「打ち合わせと違うだろ」
「緊急事態だよ。良く聞いてこの先にコカトリスが居る」
「なんだよ。コカトリスて」
「厄介な奴だよぉ。こんなところで出くわすとはついてないよぉ」
「そんなに、厄介なのか？　お前が言うくらいなんだから」
「人間にはね。私にはそんなに厄介じゃないけど」
「なんだよそれ。どう言う意味だ」
「いいから、まずこの一行を止めてコカトリスに気付かれなければやり過ごせるかも」
「下手に近付いて気付かれ暴れられたら厄介だよぉ。まず止めて。それから話すから」
シオンとランスが公爵の乗る馬車に向かい走り駆け寄った。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

～　春風と小悪魔　～　第二話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。＞（＿）＜

次回をお楽しみに！

～　春風と小悪魔　～　第三話

†ＧＡＴＥ３　石化の瞳　毒の吐息

春風に揺られ草原を彩る花達が揺られ踊っている。豪華な馬車に駆け寄る二人の少年の姿があった。

二人は護衛の衛士に声を掛けた。その話を伝えに一人の衛士が豪華な馬車の主に伝え豪華な装飾の馬車が止まると二人がクラウス公爵の下に向った。

「急に停まれとは何事かね？」

クラウス公爵が怪訝そうな顔をした。

「申し訳ございません。失礼は承知の上で恐れながら進言致します」

ランスがただならぬ様子で伝えた。

その様子に疑心を感じながらもクラウス公爵が尋ねた。

「進言とは穏やかではないな。いったいどうしたと言うんだね」

「この先にコカトリスがいるとの情報が入りました。斥候をお出しするようお願い致しに参りました」

ランスは片膝を地面に着き深々と頭を下げた。

「それは確かな情報かね？どこからの情報なのかね」

不確かな情報で妄りに護衛を減らし時間を無駄にはできない。

「それは……」

ランスは口籠ってしまった。

シオンと鬼妖精の事を話せない。

そんな様子を見てクラウス公爵が言った。

「お前が嘘や根拠の無い事を言う者ではない事は知っているが、根拠の無い事を聞く訳にはいかんのだよ」

「お父様、ランスの言う通り斥候をお出しになって見てはいかがしら？」

ティアナが口籠るランスに助け舟を出した。
予定より早いけど作戦開始かしらと思ったのだ。

護衛の衛士を減らしその隙をついて鬼妖精が化けた魔物に襲わせシオンが追い払う。
ティアナはそう思ってい、ティアナが言葉を続ける。
「もし、本当にコカトリスがいたら大変です。最悪、全滅するやもしれません」
護衛から進言されクラウス公爵も暫らく考えた。確かにコカトリスがいて暴れだせば全滅もあり得るのだ。
護衛の衛士に魔法の使い手は居る先手を取り倒せればいいが、手傷を負わせて暴れられたり先に気付かれれば、この数の護衛と自分の魔法だけでは確かに厄介な相手だった。

「解った。斥候を出そう」
クラウス公爵が言うと側に控えていた衛士を呼び二人の斥候を出した。斥候が帰るまではその場で待機である。
シオンとランスは自分達の乗っていた馬車に戻ると鬼妖精の話を聞く事にした。
「なあ、後に話すて言ってたけど、いったい何を話してくれるんだ？」
シオンは鬼妖精のに尋ねた。
「コカトリスとやり合う羽目になった時の対策よぉ」
「そんなに厄介なのか？」
「コカトリスてのは鱗はあるけど薄いから剣の刃も通るし知能も低いんだけど、奴の吐くブレスと邪視（Ｅｖｉｌ　Ｅｙｅ）はかなり厄介なの」
コカトリスは鶏冠のある雄鶏の体に蝙蝠の様な翼、蛇の尾を持ち鱗もある胴体は蛇の様で鳥の脚を持つ

同じ系列に八本足のトカゲ「バジリスク」がいる。コカトリスのブレスは植物を枯れさせ、飛ぶ鳥を落とすし睨まれた者は石になると言われている幻獣。

「ブレス自体は速くないけど範囲は広いの。触れれば植物は枯れ弱い生き物が少しでも吸っちまったら死に至るし人間でも大量のブレスを弱い者が吸い込んだなら即死する事もあるから気をつけないといけないんだよ」

「毒のブレスは風の魔法で逸らすか火の魔法で焼けばいいけど、もし吸い込んだら直ぐに解毒薬か治癒の魔法で解毒しないと駄目なの」

「一番厄介なのは……邪視。いい？　戦闘になったら絶対に奴と目を合わさまい事、石化するから。奴の石化は魔法で解除できないから目を合わせ睨まれたら最後だからね」

鬼妖精はシオン達にそう言うと話を続けた。

「アイナとランス、あなた達は戦闘になりそうになったら眠りの魔法で私とシオン以外全員眠らせて、人間て意識があると無意識で気になるもんを見てしまうから。二人も目隠しか盲目の魔法掛けておいてね」

「そんな事したらアイナ達が魔法使える事がばれるですぅ」

アイナがそう言うと鬼妖精が言った。

「大丈夫！　他の連中は四大系統だから二人の使う四大元素のとは違う。精霊の振動は感じないはずだけど魔力を感じる奴はいるかも知れない、ゆっくりでいいから深く眠らす必要も無いよ。その後はシオンの援護ね。二人はブレスだけに対応して解った？」

「目が見えんですぅのに――ぃ、どうやるですぅ」

アイナが言と鬼妖精が答えた。

「私が空から鳴き声で指示するよ」

鬼妖精はその後の事をアイナとランスと打ち合わせた。

「俺はどうすんだ」

「お兄ちゃんはコカトリスと戦うの。でも魔法を使えば簡単だけど

お兄ちゃんは、まだ魔力が不安定だから寝てる奴らを起こし兼ねないね。最悪巻き込んじゃう。魔法はもう少し慣れてからにして剣で戦って」
「戦うんだな剣でって……ちょい待てぇ――なんで俺だけ？　俺剣持ってないぞ？」
「その辺で眠った衛士の剣拾えばいいじゃん」
「……そうねて、おい！」
「二人も戦うよ。援護だけだけど。私のゴーレムに勝ったんだから出来るよ……ところであのゴーレムは？」
「あの時にお前のゴーレムと一緒に粉々になった」
「……じゃあ、剣で戦ってね」
「勝ってねぇよ」
「勝てる。お兄ちゃんの動きなら奴の死角に回り込める」
「お前のゴーレムと剣でやり合ったなんて未だに信じらんねぇしあの時は無意識で動いてたからな」
「俺よりお前の方がいいんじゃないか？　お前には厄介な奴でもないんだろ？」
シオンは腑に落ちないので鬼妖精に言った。
「私なら奴の邪視の射程外から魔法でけり付けるかな？　ゴーレム作る暇ないし」
話を聞いていたランスが不思議に思う点を鬼妖精に尋ねた。
「ゴーレム作るのは時間掛るけど、きみの魔法なら一撃じゃない？」
「お前が行って倒してこい」
シオンが言うと鬼妖精がしょんぼり答えた。
「だってぇ――お兄ちゃんに半分取られちゃってるもん」
「わ、悪かったな……」
申し訳なさそうにシオンが言った。
「いいよ。別に気にしてないから」
鬼妖精は、ぺろりと舌を出しにんまりと笑みを浮かべた。
「例え、魔力が半減していても私が本気で魔法戦をしたら地面無く

なるかも」
どんな魔法使うつもりなんだろ？　と三人は思った。
「俺に魔法使った時はなんで威力押えたんだ」
「押えてないよぉ。あの時、私はお兄ちゃんを限定して“破壊”を付与していたの。けど、不思議な事に私の魔法とお兄ちゃんの不思議な力が交差した時、私の魔法は不思議な力に、たぶん魔法だけど私の魔法が破壊され威力が落ちたの。自分で使っといてそんな事も解らないの？」
鬼妖精が笑った。
「コカトリスの後ろに回って奴の首を薙ぎ払えば危険が少ないよ。奴の視界は広いけど短いから正面からは絶対に行っちゃ駄目だよ」

斥候に出た二人の衛士は話しながら偵察に向っていた。
「本当に居ると思うか？」
一人の衛士が疑念を含んで言った。
「さあな、居ないに越した事無いが」
もう一人の衛士が言うと視界に何かが映し出された。
「何か、居るぞ」
「でかい鶏みたいだな」
「コカトリスだ。本当にいやがった」
「俺は報告に向う。くれぐれも不用意に仕掛けるなよ」
そう言い残し一人が報告に戻って行った。

鬼妖精のアドバイスが終わり暫らくすると斥候に出ていた内一人が戻ってきたて公爵に報告している。
「おおよそ二・五キール程先にコカトリスを確認しました」
その報をクラウス公爵は驚きの面持ちで聞いていた。
ランスの進言に疑念を抱いた。ティアナに促され偵察に斥候を向けたが本心は疑っていた。
報告を待ち聞いても何故、この先にコカトリスが居る事にランス

が気付いたのか理解出来なかったが、事実いたと報告を受けている。
クラウス公爵に傍に控えた衛士が声を掛けた。
「いかがなされますか。先手を打ちコカトリスを倒しに魔法の使い手を向わせますか？」
「いや、このままやり過ごす。もう一人の斥候の報告を待つ」
クラウス公爵が言った。
「解りました」
衛士は後ろに控えた。
先頭で見張っていた衛士が前方の以上に気付く。
毒々しい灰色の煙の様なものが見え、辺りの植物が枯れていくのが見えた。
コカトリスのブレスだった。
残って様子を窺っていた斥候が近付くコカトリスに気付かれたと思い恐怖の余り矢を放ったのだ。
矢はコカトリスの翼の皮膜に刺さり激高したコカトリスが暴れこちらに向っている様だ。

周りの衛士達は一気に慌ただしさを増した。
「来たみたい。いいかさっき言った事、忘れないでね」
鷹の姿に化けた鬼妖精がそう言い残し空に飛び立った。
それが合図かの様にシオンが馬車から飛び出すしアイナとランスが眠りの魔法を静かに唱え出す。
「眠りを誘う精霊よ我の訴えに答えよ」
この騒ぎの中、アイナとランスの魔力を感じる者はいなかった。
魔法の使い手の衛士も詠唱に入っていたので幾人かの魔力が交錯していた為だ。
周りが眠りの魔法で静けさを取り戻していく中、シオンはコカトリスの位置を鬼妖精から指示を受け、
コカトリスの位置を窺う。
二人も鬼妖精の指示で動くが戦闘経験のない上に目隠しをしてい

る二人はぎこちない。
　馬車から降りる際、アイナは転んでスカートが捲れお尻丸出しになったが、眠りの魔法で皆眠りに入っていて誰も見ていないので、ホッとしていると誰かに掴まれた。
「いたいですぅ――」
　アイナが言うと脇を抱えて起こしてくれた人物がいた。
「ありがとでぇすぅ？　えぇ？」
　聞き慣れた声がする。
「なにやってんだ？」
　シオンの声だった。
　シオンが鬼妖精の指示で飛び出しコカトリスの後ろに回ろうと馬車の陰で次の指示を待っていたところにアイナが転げ落ちてきたのだった。
　勿論、コカトリスの後ろから回り込む手はずなのでシオンは目隠しをしてない。
「み、みみ、見たですぅ？見たですかぁ」
　アイナは飛んだ失態を見られてしまったのだ。
「なんとか言いやがれですぅ。アイナのケツ見えたですかぁ」
「見てねぇよ。今日は水色花柄だったなんてしらねぇ」
　シオンが遠回しに事実を伝えた。
　アイナはコカトリスの事なんて頭の中から吹っ飛んだ。
　シオンに見られた。シオンに見られた。シオンに……と恥かしさで頭は一杯だったが、シオンがアイナに言った。
「そんなの気にしてる場合じゃないぞ」
「そりゃ、気にしますよぅ」
「来るぞ。ブレスだ」
　シオンが叫ぶ様に声を張り上げた。
　アイナが考えている暇は無いと思い直し呪文を唱える。
「流れを司る風の精霊よ流れを変えよ」
　コカトリスのブレスはアイナの魔法で流れを変え天に向かって逸

れていった。
ランスも一行に流れるブレスを流し逸らし焼き払う。
コカトリスは激高してブレスをと処構わず吐き散らしている。
鮮やかに緑に満ち咲き誇っていた花が見るも無残に枯れていった。
Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

～　春風と小悪魔　～　第三話（後書き）

最後まで読んで頂きまして誠にありがとうございました。＞（＿）＜

次回をお楽しみに

～　春風と小悪魔　～　第四話

†ＧＡＴＥ４　悲しみの大地

戦いの最中、鮮やかだった緑の大地は荒れ果て大地は悲鳴を上げている様に思えた。

「ひでぇ」

シオンが無残に変わり果てる光景を見て呟いた。

目隠しで視界を塞いでいるアイナには何も見えないが鬼妖精の話を思い出した。

コカトリスのブレスの効果、植物を枯らし弱い生物の命を奪う。

アイナには心の目で見ているかの様に無残な光景が流れ込んできて、その痛みにも似た感覚が、本当はやさしいアイナの心を強く痛めた。

シオンは激高し暴れ狂うコカトリスに近寄れないでいた。

敵が思う様に動いてくれる筈は無いと思ってはいたが、ここまで暴れられてはどうにもならない。かといって正面に出る訳にも行かない。

コカトリスの邪視（Ｅｖｉｌ　Ｅｙｅ）を絶対に喰らう訳にはいかないのだ。

オーク戦やゴーレム戦で身体に感じた羽の様に軽い動きも出来ないし魔法は鬼妖精に止められているし

仮に使ったとしても慣れない魔法で正確な狙いをつける自信は無い。

追尾させる事も動きを制限し放つ事も並みの魔法の使い手ならば出来るだろうが、魔法を感覚で習得しただけのシオンには、そこまで魔法を思い通りに使いこなせる筈はないのだ。その事をシオンは感覚的に知っていた。

戦いが長引けば、浅い睡眠魔法で眠らせた皆の眠りが覚める。近い内にアイナとランスの魔力の限界も来る。
情けねぇとシオンは思った。
肝心な時は身体が思う様に動かない。魔法も魔力も不安定で自分の意思で思う様に行使できない。
安易に古代語魔法はおろか精霊魔法も使えば皆を巻き込んでしまうだけだ。

アイナの小さな胸と感受性豊かな心は毒のブレスに侵され失われていく息吹達の痛みが流れ込んでくる様で苦しく切ない思いで一杯になっていた。
「やめて、もう、やめてぇ――」
アイナが叫ぶと目隠しを取りシオンに言った。
「アイナが囮になりますぅ」
「馬鹿、言うな。お前死ぬ気かぁ」
アイナの眼には涙と強い意志が宿らせシオンを見詰めた。
コカトリスを気を引く為には正面に身を曝す事になる。
その行為はコカトリスに睨まれ邪視を喰らう危険な行為で喰らえば終わりだ。
「もうこれ以上、綺麗な花たちを痛めたくないですぅ」
アイナの二色の宝石の様なオッドアイの瞳に涙が溢れた。

くそ、なんとかしてやりてぇ。シオンは強く思た。
「お前、戦い嫌いだろ？」
「戦いは嫌いですぅがぁ。アイナも護りたいものを護るですぅ」
眼には涙を溢れさせている。
そんなアイナを見てシオンが尋ねた。
「お前にあいつを倒すだけの魔力は残ってるか？」
シオンは囮をアイナと代わるつもりだった。
「もう、確実に倒すだけの魔力はないですぅ」

「初めからお前等と代わってればよかったな」
シオンが悔いる様に言った。
ほんと、なさけねぇ

「一緒ですよぅ。アイナは攻撃系は苦手ですぅしランスも戦闘経験ないですぅから同じですぅ」
アイナが言葉を続けた。
「シオンはシオンは、アイナ達の為に命懸けで戦ってくれたですぅ。ランスもアイナもシオンを信じてますぅ。だから、命を預けますぅ」
そう言い残しアイナはコカトリスの前に飛び出していった。
コカトリスが飛び出したアイナに気付き頭を振り向け様としていた。
シオンの中にアイナの言葉が甦る。
『シオンを信じてますぅ。だから、命を預けますぅ』
その瞬間、シオンの中の眠れる戦闘の記憶が無意識に身体を動かせオーク戦の動きを取り戻した。
「勝手な事言うなよなぁ」
シオンは呟くと飛び出した。
その動きはオークの時よりも切れていた。コカトリスとの距離はオーク戦の時の約二倍強ある。

アイナにはコカトリスの振り向く様が、ゆっくりと見える様に思う程、時間が止まっている様にも思えた。
邪視を喰らえば石化する。自分は死ぬんだと思うと共にシオンを信じると言った事が脳裏に巡った。
きっとシオンなら。
「シオン」
アイナは覚悟を決め目を瞑ろうとした瞬間、アイナの横を疾風が通り過ぎた。刹那、アイナの前方に居たコカトリスは見えない風に切り刻まれ絶命した。

「遅いよ。お兄ちゃん」
鬼妖精が元の姿でシオンの前に現れた。
「なんだよ。その姿は！　他の連中に見つかるぞ」
「大丈夫、精霊の働きを感じるから、まだ暫らくは起きないよぉ」
「だったら、初めからお前が魔法で倒せば良かったんじゃねぇか？」
「嫌だよぉ！　疲れるもん。それに私は不死でも不死身でも無敵でもないんだからね。皆とと同じ何時かは朽ちる。多少長生きだけどね」
鬼妖精がケラケラ笑いながら言うと身体を三十セール程に変えシオンの左肩に乗った。
「それにあんな奴に睨まれて石像なんて間抜な死に方は嫌だよぉ」
「使えねぇな」
シオンが不満そうに言った。
「ほんと、使えんチビですぅ」
アイナが便乗する。
「使えないのはお兄ちゃん！　あれだけの戦いができるのに！　それにゴーレム使えば良いのに」
「壊れたってだろ！　お前のゴーレムとやり合った時、粉々に！」
「作ればいいじゃん！　あれだけ強いゴーレム操れるなら、また魔法でさぁ」
「あれは魔法じゃ造れないの！」
「素早いんなら最初からしなよぉ」
「あの動きが出来る時は自分でも不思議なんだよな」
シオンが首を傾げた。
「使な――い」
「ほんと、使えんですぅ」
アイナが便乗する。
「あんたもね。花柄パンツ」
「チビペタお前見たですかぁ」
「私、目がいいから。毛の生え際まで丸見え」

「ア、アイナはそんなに濃くないですぅ！」
真っ赤な顔でアイナが言うと拳を構えた。足の指先から膝、腰、肩、肘、拳に力を捻り込む様にして鬼妖精目掛け拳を振った。
鬼妖精は、ひょいと拳を避け上空に飛んだ。
拳は空を切ったと思いきや、ゴキュと音を立てシオンも顎に入りシオンは膝から崩れる様に倒れ気を失しなった。
鬼妖精は笑っていたが、スイングした回転を生かした裏拳を喰らい空の彼方に消えた。
「何してるの？」
魔法の連発で疲れきったランスが傍に来た。
「別に、何もですぅ。ランスお疲れでしたねですぅ」
アイナが労いの言葉を掛けた。
「疲れたぁ……シオンもこんな所で寝てるし相当、疲れたんだね」
ランスが微笑んだ。
「そ、そうですねぇ。シオンも疲れてるですぅ」
何気ない顔をしてアイナが言った。
「僕は先に行って馬車で休んでるよ」
ランスが言い残し馬車の方へと歩き出した。

アイナは不可抗力とはいえ殴り倒したシオンを見て可哀想になり膝枕をして介抱しながらコカトリスのブレスで荒れ果てた草原を見ていた。目の前の萎れた花を摘もうとして身体を前に倒した。
シオンの顔にアイナの柔らかい胸が触れる。顔面に〔むにゅ〕と何かが当たったのを感じ眼を覚ました。この柔らかいもの何？　と思ったがそれがアイナの胸と気付き、暫らくその柔らかな感触に寝ている振りをして堪能したがアイナが身体を起すとやわらかい胸が離れた。
アイナは萎れた花を胸の前で祈る様に手に握り締め枯れ果てた草原を見ていた。
もう一度身体倒さなかなぁ。と寝た振りを決め込んでいると頬に

温かい液体が落ちてくる。
「泣いてんるのか？」
思わずアイナに声を掛けた。
アイナは答えない。涙は止む事なくシオンの顔に落ち続けた。
シオンは枯れ果てた草原を見てやるせない気持ちになり花の咲き誇っていた草原を見て『綺麗ですぅ』と言って喜んでいたアイナの顔が浮かんだ。
「きっと、また草原に花は咲き誇るさ」
アイナの涙は更に零れ落ちた。
「この子達の息吹は何処に行ったですぅ？」
シオンは答える事が出来なかった。
「さみし……ですぅ。悲しいですぅ……」
アイナがぽつり、ぽつりと言った。
「まも……れなか、たですぅ」
アイナは嗚咽を混ぜ泣き続けた。

シオンはそんなアイナを、ただ見ている自分が悔しかった。
一人の女の子の悲しみも止められない。自分に命を預けると言ったアイナに何も応えられない自分を恨んだ。
「絶ちたいか」
シオンの耳に何処からか声が聞こえた。
聞き覚えのある声。
「お前は悲しみを絶ちたいか」
シオンの心の中に響く様に聞こえて来る。俺は絶ちたい。一つだけでも絶ちたい。
アイナの今の悲しみを絶ってやりたい。自分にはそれが出来ない。
「我はお前に託した。お前が強く願うなら我はお前の力となろう」
「我を取り振るえ」
眼前に光を伴い魔方陣が出現しその中心にフィノメノンソードの柄が現れシオンはフィノメノンソードの柄を掴み引き出した。

シオンが起き上がりフィノメノンソードの柄を両手で握り構えた。
鍔元にあしらわれた宝石を中心に翼を模った装飾が左右に開き短い刀身が姿を現した。
見た目は両刃の短剣に大剣の鍔と柄という不恰好な剣。
刀身が七色に光出し鍔の左右の端から端まで光が満ち刀身の延長線で結ばれ七色に輝く透明の刀身が現れ大剣と化した。
「我を振るえ」
声が木霊した。
シオンは枯れ果てた草原に向かい剣を水平に薙ぎ払った。水麺に波紋を描く様に光が広がり枯れ果てた草原は再び生命を取り戻した様に枯れ果てていた大地は咲き誇る花で満ちた。

アイナは目の前で何が起こったのか理解出来ない。ただシオンがそれをたった事は解った。
アイナの目には悲しみの涙が去り喜びの涙に変わり微笑みが戻った。
「ありがとですぅ――。　シオン」
歓喜の余りシオンの腕に抱きついた。
シオンの腕に再び、柔らかいアイナの胸の感触が甦る。

魔法で眠りに落ちていた者達が目を覚まし出した。辺りは静かでコカトリスの屍が残っていた。自分達はコカトリスを迎え討つ準備をしていたが、それからの記憶が無い。
コカトリスは少年が倒した様だが……。
状況がまるで掴めない。

ティアナも目を覚ましコカトリスの屍を見付けた。シオンも然程、離れていない場所に居る。シオンを領地に招く作戦と思っていたが、自分がさらわれずにいたので何かおかしいと思ったら本当の騒ぎになっていた。

コカトリスの動きからこれは作戦じゃないんだと直感した。現実だと理解した時、シオンが馬車から飛び出す姿が見えたがその後の記憶は無い。

再び、コカトリスの屍に目にやり次いでシオンとアイナの姿をティアナの瞳が映し出した。

シオンがコカトリスを倒したのだと『やっぱり強く素敵な人とね』とティアナは胸中で呟き走り出した。

ティアナの目にはシオンに抱きついているアイナの姿は最早、目に入っていなかった。

「シオン！」

ティアナが叫び駆け寄りアイナを突き飛ばしシオンに抱きついた。

その光景を再び咲き誇った花達が見て嬉しそうに風に揺られていた。

To Be Continued

～　春風と小悪魔　～　第四話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。＞（＿）＜

次回をお楽しみに！

～　春風と小悪魔　～　第五話

†ＧＡＴＥ５　妖精の宿る小人像

枯れた草原に再び息吹が宿る緑の大地に陽光を浴び淡いブルー、ほのかに浮かぶ銀髪が揺れる。

シオンは途中の分かれ道で運命を分つ筈だったのだが、コカトリスを倒したシオンを領地に招きたいとクラウス公爵の娘のティアナが懇願した。

終いにはシオンに興味を持ったティアナが自分の従者にすると言い出す始末。

公爵もコカトリスの一件を良く理解出来ていないでいたが、シオンが倒した事は疑い様のない事実だ。

何故、自分達が眠り込んでしまっていたのか疑問は残っているが、シオン達は毒のブレスに中てられ皆が気を失ったのだと説明した。

自分は以前にも戦った事があったので対処が早かった為、毒のブレスを吸わなかったのだと解毒についても幸い皆が吸い込んだ毒が少量だった為、手持ちの解毒薬で足りたと苦しまぐれの言い訳をした。

クラウス公爵も護衛の衛士もそれなりの戦闘経験は持っている。釈然としないでいた。

コカトリスに気付かれなければ、策を用いた戦い方をすれば然程手強くはない魔獣で厄介な相手である事は間違いない。激高したコカトリスは特に厄介だ。

それをシオンは一人で倒してしまったとなれば強い剣士は自分の候軍にほしい。

ティアナにせがまれ連れてきたが、素性の解らない人物に違いない。

クラウスは雇うかどうしたものか迷っていた。

公爵の他にもう一人思い通り？　なのか思いもよらない展開に戸惑う者がいた。

それはアイナだった。

ランスは事の成り行きは兎も角結果的にシオンと共に居れる事になるので思惑通りになったと思っている。

アイナもそれは同じなのだが、ティアナが自分の従者にすると言い出したのである。

シオンは気になる男の子。

それが恋心だとは、まだ気付いてないアイナの心“ヤバイ”と言っている。

ティアナは公爵家のお嬢様。自分は小さな村の村娘の使用人。ましてやティアナは自分の従者にシオンをすると言っていた。

同じ屋敷内に居ても専属の従者と一使用人の自分との見えない距離が広がって行くのは必至なのだ。

ティアナは何時もシオンと一緒に居る事になり距離は縮むだろう。

どうやらティアナもシオンに好意抱ている様だ。

ティアナがシオンに抱きついた時、ティアナの胸がシオンの腕に押し付けられる格好で触れた。その感触をデレデレした顔で堪能していたシオンの事を思い出す。

アイナは決して大きい方ではない自分の胸の膨らみを見て溜息を吐いた。

次いでティアナの胸を思い浮かべる「はぁ」切ない溜め息が漏れた。圧倒的に負けている。

更に、いつぞやのオンの持ち物に描かれていた写真の女性の裸が脳裏に浮かぶ「ヤバイですぅ」アイナの恋に気付いていない乙女心がそう叫ぶ。

何とかしないとシオンはティアナ取られる。何とかせねばとアイナの頭はフル回転していた。

「はぁ」
アイナの口から疲れた溜め息が漏れた。
「どうしたの？　最近溜め息ばかりだね」
ランスが元気のないアイナに声を掛けた。
「何か拾い食いでもしたか？」
溜め息の元凶。シオンが言った。
「そんな事しないですぅ」
アイナが眉を吊り上げ怒っているが、何時もの凄みを感じない。
クラウス公爵とティアナは今夜から王宮で三日程の間行われる『春のエリュシオン舞踏会』に招かれ王都には五日程の滞在する。
従者達がお嬢様は、王都の高等学院に入学するのでそのまま王都に残る事になるかも知れないと噂を立てていた。
その事を聞いたアイナは更に焦らせた。

一行は宿を取るとクラウス公爵とティアナが王宮に向う準備で慌ただしくなる。
シオンは、まだ正式に雇われた使用人でも何でもないのでロビーで待っ事になった。
着替えに向う前、ティアナが衛士達に向かい言った。
「護衛の者に騎士の称号をお持ちの方はおりますか？」
「騎士の称号を賜っている者は同行しておりません」
護衛隊の筆頭衛士が答えた。
「そうですか。困りましたね」
困った顔してシオンの方にチラッと目をやった。
舞踏会の会場に入場する際、淑女は騎士のエスコートで入場する。見栄を張る貴族の中には自分の領地の騎士を伴う者もいるが形式的なものである為、多くは王宮の騎士がエスコートするか持たない者が騎士に扮しエスコートしていた。
ティアナはそれを知っていたのだが、シオンを連れ出したい様子だった。

勿論、平民？　でシオンに騎士の称号は愚か市民権もない。
「本当に、困りましたね舞踏会の入場には形式的なものですが騎士様のエスコートが必要ですの」
ティアナがシオンの方を再びチラッと目をやった。

アイナはその視線を逃さなかったが、シオンは騎士ではないし衛士ですらないので気にしてなかった。
形式的な事だと護衛の衛士達はもちろん知っている。公爵家のお嬢様のエスコート等そう出来るものではない。
皆が思う中、その内の一人の若い衛士がティアナの困る姿を見て何か言うと口を開いた。
その衛士が「もし、私でぇ……」と言い掛ける――。
ティアナは“目で殺す”と云わんばかりの眼力で押さえ込んだ。

その眼が語っている。『余計な真似をするな』と、それはメデューサの眼光を思わせコカトリスの邪視で石化した様に若い衛士は固まった。
ティアナは何事もなかった様に微笑むとシオンに言った。
「あ、あの……もし宜しければシオンさんにお願いしたいのですが……」
ティアは顔を紅色に染めた。
確かに荒れ狂うコカトリスを倒したとはいえ何処の誰だか分からない者に公爵家のお嬢様の方からエスコートを申し込むとは誰も思いもしなかった。
何も知らないシオンにほぼ全員の殺気を含む視線が集まった。

アイナは驚くと共に焦った。
公爵とティアナはこの後、王宮に向かい今夜から舞踏会が開かれる期間王室に泊る事になる。
シオンが受ければ共に行く事になる。

チラッとシオンの様子を窺ってみた。
　シオンは微笑んで答え。
「お断りします」
「そうですか」
　ティアナは寂しげ俯いた。

　クラウス公爵とティアナが着替えを済ませロビーに出てくるとそこに居た全員の眼がティアナに釘付けになった。
　その美貌は美しかった。淡いスカイブルーのドレスがティアナの可愛らしさと美しさ、爽やかさと華やかさを競演させる。
　胸元が大きく開いたドレスから覗く肌は白く、春の晴天に浮かぶ雲の様だった。
　シオンの視線も自然に胸元に釘付けになっている。
　アイナも清楚で可憐なティアナに見とれたが、ハッとして視線をシオンに向けた。
　もしやと思い横目で見ながらシオンの目線をホーミングすると思った通りの場所に吸い込まれていた。
　自分のそれより深い谷間にシオンは夢中の御様子である。
　アイナは改めて自分のそれを比べると「はぁ」と溜め息を付いた。

　公爵とティアナを見送り宿に残った者達は食事を摂った。食事を終えるとそれぞれの部屋に戻っていった。
　クラウス公爵が長旅の皆を労い宿を貸切り一人一部屋を与えてくれた。
　シオンは気が引け断ったが「いいから使いなさい」と公爵が言ってくれた。
　シオン達、三人は暫らくロビーで歓談をしていた。ロビーの壁の掘り込みには小人像が並んでいる。
「あっ！　あの小象達にアービィが宿ってる」
「アービィてなに？」

シオンが尋ねると袋の中から答えが帰ってきた。
「妖精だよ。妖精」
鬼娘が答えた。
「珍しいのか？　アービィとやらが宿るのって」
「珍しくはないよ。物や肖像に宿って人に悪戯をするんだ。危害を加える事はないけどね」
ランスが答えた。
「動くのか？　あの象」
シオンは不思議そうな顔で像を見渡した。
「夜中に人が寝静まると動き出して踊ったり人に悪戯するんだよ。だから小悪魔て呼ぶ人もいるよ」
「お前等、見た事あんのか？」
シオンが尋ねてみた。
「あるよ。何度かぁ――ふぁ――疲れて眠くなったから部屋に戻るよ」
ランスが欠伸をしながら部屋に戻っていった。

暫らくシオンは考え事をしていた。公爵の屋敷に置いて貰うにしても自分が何者か解る訳でもない根本的には何も解決していないのだ。
ぼんやりと考え込むシオンを見てアイナが声を掛けた。
「ぼんやりしてどうしたのですぅ」
少し震えた声で言った。
「ちょっと考え事してた」
アイナの脳裏にティアナ姿が浮かびシオンの目線を思い出すとムカムカしてくる。
「ふん！　何を考えてるですぅ？　さっきのティアナの事でも考えてるですかぁ」
アイナは頬を膨らませた。
「なに怒ってるんだ？　そんなんじゃねぇよ」

シオンがぼんやりしたまま答えた。
「じゃあ、なに考えてたですぅ？」
「俺……何者なんだろうってさ」
シオンは寂しそうに呟いた。
「シオンはシオンですぅ。何者でもなくシオンですぅ」
アイナは屈託のない笑顔でシオンに答えた。
「そうだな」
シオンも僅かに微笑んだ。

そうだな。今はその事実しかない。自分の記憶の為に色々助けてくれるアイナやランスもいる。知識も強さも頼れる鬼娘もいる……シオンは思う。
何時までも鬼娘もなんだし名前とかあんのかなぁ？　あいつ……聞いてみて無いなら名前考えよう。名前の解らなかった時の自分に重なる名前の無い寂しさ。
隣では自分に名前をくれたアイナが欠伸をし寝むそうにしていた。
「そろそろ寝るか」
シオンが部屋に向おうと袖に何か引っ掛る様な感じがした。
見るとアイナがシオンの袖を抓んでた。シオンが部屋に歩き出すとアイナも着いて来る。
「どうした？　おまえの部屋は逆方向だろ？」
「べ、別にどうもですけど……」
アイナの顔に不安な表情が浮かび、袖を掴んでいる手が震えていた。
「震えてるぞ。熱でもあるのか？」
シオンがアイナの額に手を当てた。
「熱はない様だなっと」
シオンは額から手を離した。
その時、小人像の辺りで物音がした。
「ひぃ！」

アイナはアービィが怖いのだ。
「もしかして怖いのか？」
「べ、別に怖くないですぅけど……その……シオンが怖いと思って……」
強がりを言ってはいるが震えている。

アイナの態度でシオンはピンと来て言った。
「お前、あれが恐いんだろ？」
アイナは素直に、こくりと小さく頷いた。
アービィの悪戯が怖くて眠れない時は今でもランスと一緒に寝る事がある。
「部屋の前まで送ってやるよ」
「あ、ありがとですぅ」
アイナは短く答えた。
部屋の前までアイナを送るとシオンは自分の宛がわれた部屋に向おうとしたが、アイナは袖を掴んで離さなかった。
「ラ、ランスがですぅよ？　怖がる時は仕方ないから一緒に寝てやるですぅ……」
恥かしそうにアイナは俯いた。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

～　春風と小悪魔　～　第五話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。＞（＿）＜

～　春風と小悪魔　～　次回最終話

次回をお楽しみに！

～　春風と小悪魔　～　第六話（終幕）

†ＧＡＴＥ６　寒い朝の温もり

辺りの空気も寝静まり静寂に包まれている宿の一室にシオンとアイナがいた。

アイナがアービィを怖がるのでアイナが寝付くまでシオンが側にいてやる事にした。アイナはベッドに潜り込んでいた。

シオンはアイナに背を向けベッドにもたれ掛りアイナが寝付くのを待っていた。

するとなにやらロビーの方から音が聞こえてくる。

シオンはアービィの事を聞いていたが、本当に動き出すとは思ってなかったので今一実感がなかったが、本当に動くんだなと思っていた。

肝心のアイナは眠れずにいた。

シオンが側にいてくれるが、怖いものはやっぱり怖いのである。アイナは気を紛らわそうとシオンにしゃべり掛けた。

「ねぇ？　シオン―ん　何かお話してくださいですぅ」

何時も元気一杯で悪態を放つアイナは何処にいったのかと思う位に甘えた声を出して言ったのでシオンは、何だか可笑しくなった。

「なんだよ。眠れないのか？」
少し笑いの交じる声でシオンが聞いた。
「なんでもいいですぅ。シオンの事とかぁ」
「俺の事を俺に聞くかなぁ？　話してやりたいけど記憶ないからな」
シオンが笑いながら言った。
「うーー、そうでしたぁ。じゃあぁーー、この間の草原での事覚えてますぅかぁ」
「覚えてる」
「あの不思議な〔ちから〕はなんですぅ？」
アイナが草原でシオンがフィノメノンソードを振った時の事を聞いてみた。
「俺にもよく解らないけどな。あの現象と〔ちから〕がなんなのかなんて」
シオンが答え続ける。
「声が聞こえたんだ。あの時の声が」
「あの時の声？」
アイナが尋ねた。
「ゴーレムとやり合った時に、お前が俺を呼んでくれたそれまで聞いてた声だよ」
「何を話してたんですぅ？」

「前も言ったけど、ほとんど覚えてない〔お前に託す〕て言葉とお前の呼んでくれた声だけだ」

アイナはあの時のキスを思い出し顔を赤らめ余計に眠れなくなった。

「シ、シオンはあの時の事、お、覚えてますぅ？」

「ああ、覚えてる。それが今の俺の全てだ」

シオンは顔を上げると天井を見詰めて言った。

『キ、キスが全て？』シオンはアイナが好き？　言わないけど好き？　確かめたい。

「ど、どういう事ですぅ？　その……つまり――」

「俺には記憶がない。お前とランス、そしてナタアーリアさんに俺は命を助けてもらった。記憶の戻ってない今の俺にはお前達と出会ってからが俺の全てだ。何時かは記憶も戻したいけどな」

シオンが笑顔で言った。

ちょっと残念な答えのアイナだった。

アイナはシオンがキスの事をどう思っているのか知りたいが聞くのも恥かしく聞けずにいた。

「へぇ――くしょん！　春はのに今夜は流石に、まだ冷えるな」

シオンは、ぶるっと身を震わせた。

「早く寝ろ。寒いし俺も眠くなってきた」

シオンは大きな欠伸をした。

早く寝れと言われて直ぐに寝付ける訳でもないシオンの事で余計に目は冴える。シオンは寒いから早く部屋に戻りたいのだろうとアイナは思うが、アービィ達もガタガタしているしシオンが部屋に戻れば怖くて眠れない。どうしたものかアイナは暫らく考え言った。

「シオン……寒いですしお布団に入るですぅかぁ？」

「お、おまっ！　なに言ってんだよ」

突然の申し出にシオンが焦った。

「ランスはアイナが怖くて眠れない時、隣で添い寝してくれますぅ」

「お、お前らは姉弟だろ。俺はなんだその、一応男だし……いろいろと問題が」

内心複雑な気持ちのシオンだった。

「風邪、引きますよぅ」

シオンもアイナの側にいる事はやぶさかでない。

アイナをほおって行くのも可哀想だし、このままではなんといっても寒い。

シオンは仕方なくベッドの端に潜り込んだ。

布団の中はアイナの体温でほのかに暖められている。

「あったけぇ――」

思わずそんな言葉がシオンの口から漏れた。

アイナは寒い中、自分の為に側に居てくれるシオンを不敏に思い言ったが、気が気ではない胸の鼓動が高鳴ってゆくのが分かる。

その高鳴りを感じてアイナは思う。私、シオンが好きなのかな？胸がドキドキする。こんな事は初めて……。

シオンが側にいると何時も不思議な気持ちになる。胸が高鳴なり何だか安心する。

何時も自分を助けてくれるからなのだろうか。分からない不思議な気持ち。

シオンもなんだか胸が高鳴り鼓動が早くなっていく自分に気付く。思えば何時もアイナが力をくれる。

意識してなかったが、こいつの事になると不思議と力が湧き上がり自分でも分からない程力が出るんだよなと、ふと思った。

なんだか分からない緊張感が二人を包むんでいる。やがて暖かい布団の中でシオンは眠りの世界へと櫂を漕ぎ出し寝むりに就いた。

寝付けずにいるアイナがシオンの方に寝返りを打つ。

「シオン」
アイナが声を掛けた。
返事はない。シオンは静かに寝息を立てている。
シオンは自分の事をどう思ってるんだろう。自分はこんなにドキドキしているのに平然と寝てるし『おばかシオン』と小声で呟いた。
静かな夜の静寂の中、アービィ達の騒ぐ音は次第に賑やかになりアイナの耳に届いて来る。
シオンは寝てしまているし急激に怖さが戻ってくる。シオンが隣で寝ているせいか少し安心感はあるが、やはり怖い。
アイナはシオンに寄り添うと頭をシオンの肩に乗せた。
頬が触れそうになる位の距離。
やっぱり、いや先程より鼓動は早くなってドキドキする。でもすごく安心感が溢れるこうしてると先程までの怖さが消えていく。
アイナはその安心感に包まれ眠りに落ちていった。
どれ位寝たのか分からないが、アイナが自分の胸に違和感を感じ目を覚ました。

「うぅ……あっ……ひぃん」
アイナの小さな唇から吐息が漏れた。
アイナも寝ぼけていて、はっきりしない頭だったが、何かが胸の上で動いているのが分る。
寝ぼけながらにシオンが隣で眠っていた事を思い出す。
「ち……ちょっと！　ひゃん……シオン……もぉ！　シオンてばぁ—♡」
アイナがそう言ったが、シオンは答えない。
でも、ちょっと位なら我慢してやるですぅ。何がちょっとならなのか分からないのだが、アイナはそう思ったのである。
何度も助けてくれたですしアイナもシオンがちょっと気になってますしでも、ちょ、ちょっと、ちょっとだけですぅよ。などと思いながらアイナは寝た振りをしていた。
しかし、その動きはアイナの胸を更に強く刺激し大胆になっていく。
「あん……！　シ、シオン……ひゃん……もぉ——！　ダメですぅ……よ。シオンんん」
ついには寝巻きの中に忍び込んできた。
「シ、シオン……ダメ……ちょ！　やぁん—！」
アイナの小さな胸の敏感なつぼみを摘まれた時、ハッと眠気は去り我に帰る。

「シオン、なにしてるですぅ！　まだアイナの事「好き」て言ってないのですぅよ。こういう事はきちんとプロポーズしてからですぅ！」
アイナが飛び起き隣で背中を向けて寝ていたシオンを殴り飛ばした。

余りの勢いにシオンがベッドから転げ落ちた。

いきなり眠りの世界から呼び戻されたシオンが怒鳴た。
「痛ぇ！　何すんだぁ――」

「な、なにって、アイナの乳触りやがったですぅ」

シオンは何の事だか分からない。シオンは眠い目を擦りながら言った。

「なんの冗談だ。これは？　いきなり殴りやがって」

「どうもこうもアイナの乳揉みしだいておいて！　よくもまあ、そんな事いえるですぅねぇ！」

「はあ？　お前なに言ってんだ。してないぞ。そんな事、俺は」
シオンは覚えのない言い掛りに怒った。

「何度か助けて貰ったしちょっと我慢してやったのですのに！　ああゆう事は、はっきりアイナの事をすぅ……」
言い掛けアイナは頭を傾げた。

シオンを殴った時、確かシオンは背中を向けていた。

じゃあ、誰が？　アイナが思っているとシオンが覚えのない言い掛りに腹を立て勢いで言った。
「そんな、貧弱な胸触るか」
「なんですとぉ！　そりゃシオンの持ってた本の女程ないですけど、アイナもそれなりにありますぅ。それなりに……」
言いながら自分の胸の膨らみを見て虚しくなりその怒りでシオンを殴り飛ばした。
すると布団の中からロビーに並んでいた小人像が、ひょろひょろと蠢いて出てくる。
それを見た怖がりのアイナは自分が殴り飛ばしたシオンに飛びつく。
「きゃぁ！　でた、でた、でやがったですぅ――シオン助けてぇですぅ」
半泣きになるアイナを見てシオンは仕方なさそうにアービィの宿る小人像を抓むと部屋から出て行こうとした。
「ど、何処に行くですぅかぁ。シオン」
アイナは驚きの余り泣いていた。
「どこって、これ放り出したら部屋に帰って寝る」
シオンが抓んでいるアービィを指差した。
「うっうぅ……ダメですぅ。ここに……いでぐださいですぅ……うっ、うっ」
泣くアイナを見てシオンはアービィを部屋から放り出すとしかた

ねぇ奴だなと思いながらアイナの側に戻った。

「ありがとですぅ」

「ああ、いいよ」

シオンが機嫌悪そうに言った。

「居てやるから早く寝ろ」

アイナは、こくりと頷き布団に潜り込んだ。

シオンは床に寒さに蹲る様に座り込んだ。

「風邪引きますぅよ。シオンも早く布団に入るですぅ」

「また疑われて殴られるのは、ごめんだ」

シオンが言うとアイナはしおらしく謝罪の言葉を延べた。

「ごめんなさいですぅ」

えらく素直だなと思いながらシオンは布団に入った。

暫らくするとシオンは眠りに落ちる。

アイナは、シオンが寝息を立て始めるのを確認するとシオンの肩に頭を乗せた。やっぱりなんだか安心する。

「さっきは殴ってごめんですぅ」

小声で呟きシオンの頬にキスをした。

「でも、アイナのちちを馬鹿にした事はゆるさんですぅけど、ふん！」

寝ているシオンにペロッと舌を出した。

シオンは寝た振りをしていた。

アイナが眠ったらそっと自分の部屋に戻るつもりだった。

そうしていたらアイナが頬にキスしてきた。

シオンの心臓は破裂しそうな程に鼓動を打っていた。

アイナがすやすやと穏やかな寝息を立て始める。

底抜けに明るく底なしに怖がりでやさしい心の持ち主。

そんなアイナの寝顔は無邪気でかわいい。

なんだか衝動的に抱きしめたくなる気持ちを抑えてシオンはそっと部屋を後にした。

何時の間にかロビーに繋がる廊下も今はアービィ達も眠りに就いたのか静まり返っていた。

アイナがキスした方の頬に手を当てシオンは思う。あの時は、つい頭に来て胸をバカにする様な事を言ってしまったが、起きたら謝っておこう。

春の朝は肌寒くどこまでも静寂が広がっていた。

†人形使いとゴーレムナイト†　春風と小悪魔　Ｅｎｄ

～　春風と小悪魔　～　第六話（終幕）（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。＞（＿）＜

～　春風と小悪魔　～　終幕

次回より～　漆黒の守護者　～　全十六話がはじまります。

次回をお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8673f/

†人形使いとゴーレムナイト†　～　春風と小悪魔　～

2011年8月13日12時54分発行